



パシフィックコンサルタンツ株式会社  
国土基盤事業本部 上下水道部  
眞崎 哲二

## － 下水道事業への思い －

小説や映画にも下水道は度々登場しますが、一般の方が思い描く「下水道」とはどのようなものでしょうか。

身に覚えのない事件の犯人に仕立てられた主人公が下水管を使って逃亡する小説がありました。東北を舞台にしたこの小説は映画化もされたため、ご存じの方も多いでしょう。下水で暮らす「かめ」が活躍する映画もありましたね。

このように下水管に下水が流れているイメージが一般の方のイメージではないでしょうか。一方で、下水処理場をイメージされる方は少ないのかもしれませんが。もちろん小学校の社会科見学などで、浄水場や下水処理場を訪れた方もいらっしゃるでしょう。生まれ育った実家は昭和の終わり頃まで汲み取り便所でした。近所の畑にも「肥溜め」がありました。小学校時代に下水処理場を見学した記憶はありません。このような状況でしたので、私も下水道事業に携わるまでは、乏しいイメージしか持っていませんでした。

上水道の普及と下水道（汚水処理）の普及の時間的なギャップが公共用水域の環境問題を生じさせたといわれていますが、令和3年度末の水道普及率98.2%（※1）に対し、公共下水道をはじめとする汚水処理施設の整備が進んだ結果、汚水処理人口普及率は令和3年度末で92.2%（※2）に達しています。

※1：厚労省資料、※2：環境省資料より（国交省・環境省・農水省の集計値）

今では、下水道のない社会は想像し難いものになっています。

「土木からバイオまで・・・」

これは、私が入社したての頃に当時の先輩から伺った言葉です。下水処理の原理は、活性汚泥法に代表される生物処理であり、それを支える土木技術があつて下水道事業が成り立っています。このような幅広い分野に見識を広めることが、コンサルタントに求められるものであることを当時認識した記憶があります。

大学時代は土木を専攻していましたが、下水汚泥の有効利用関連の業務に携わる機会があり、堆肥化や汚泥炭化物の調査・開発を通じて、堆肥化のメカニズムや炭化物の物性などにも触れることができました。その中で、下水汚泥有効利用先である農業や施設園芸従事者との協働により野菜や花卉の生育試験なども実施してきました。

また、下水処理場における温室効果ガスの排出量調査では、下水処理の状態によって温室効果ガス排出量が異なることも実現象として把握することができました。まさに「バイオまで・・・」の一部を経験させていただいたわけです。

ご承知のとおり、下水汚泥処理は肥料化を前提とした方針に大きく舵を切りました。また、2050年のカーボンニュートラル達成に向けた各分野の取り組みの中で下水道事業においては、省エネ化の推進、再エネ創出、資源循環利用の中核機能としての役割がさらに重要となってきました。そして、近年の集中豪雨に伴う内水氾濫への対策も河川行政と連携する中での重要な課題となっています。

ナショナルミニマムとしての下水道が広く行き渡った現在では、生活環境や公共用水域の環境だけでなく、地球環境も含む広い意味での環境保全と人や都市の安全を守るための防災への貢献が今まで以上に求められていると考えます。

社会的な要請は時代とともに変わってきますが、下水道の果たす基本的な役割は変わることはありません。既存の下水道ストックの機能維持を図り、最大限活用していくことで、今後もそれぞれの時代に応じた最適解を模索し続けていくのだと考えますし、コンサルタントの活躍の場も多いと考えます。

コンサルタントとして下水道事業に携わり30余年が経過しましたが、この下水道分野の幅広さに対して十分な見識を得てきたかという点、まだまだ道半ばですし、全てを網羅できるとは到底考えられません。

これから下水道事業を担っていかれるコンサルタントをはじめとする関係者の皆さんには、専門性を高めていくことに加えて、幅広い下水道分野に興味をもって見識を広めていただくとともに、新しい時代の下水道を構築されることを期待いたします。

以上